

朝鮮王陵の歴史地理学的考察

— 風水的要素を中心に —

チェ・ウォンソク

(翻訳：平郡達哉)

A Historical Geographical Investigation of the Joseon Royal Tombs:

Focusing on Fengshui Aspects

CHOI Won-Suk

本稿は、朝鮮王陵の分布・立地・配置の特徴と、景観の造成・管理に見られる風水要素について、歴史地理的に検討したものである。また景観の形態をはじめ、王陵の立地・形成をめぐって展開した政治権力集団の様相にも注目している。これらは朝鮮王陵が朝鮮史の産物であり、中国の明清代の陵とは異なる文化要素が存在していることを示している。

朝鮮王陵は都城とその郊外に分布しているが、過半数以上が20-40里以内にあり、特に北東と北西に集中している。これは、新羅や高麗王陵の分布よりも広範である。立地は、小盆地の山麓に造営される傾向にあり、平地や丘陵地に位置する新羅王陵や、山腹に位置する高麗王陵とは異なる。こうした朝鮮王陵の立地傾向は、風水的要素が反映したものと思われる。次に同じ陵域内における王陵の距離は300m前後が多く、紅箭門（陵入口）から陵までの距離は、おおむね150~200m前後である。配置は南向が絶対的である。また陵寝は、緩斜面の自然地形に盛り土をして造成され、明堂水は自然地形の水の流れに合わせて作られた。

朝鮮王陵の景観は、王朝の権威かつ象徴であった。王陵の立地選定や遷陵は、王室や王族、王と臣下、臣下が勢力伸張を図る手段となり、彼らはその名分として風水説を利用した。

風水は、朝鮮王陵の造成過程、景観築造に多大な影響を与え、王陵は風水地理の原理にもとづいて位置や配置、陵域景観が造営された。王陵の管理は国の法典で定められ、管理状況は毎年定期的に王に報告された。朝廷においては、王陵の管理をめぐり、風水の原理を固守する風水官僚と、経世の実用論理を重んじる儒臣の意見が対立し、調整される場面も見られた。韓国風水史の視点からみると、朝鮮王陵における風水は、政治集団の社会的属性を反映した言説であったと言える。

朝鮮王陵関連の歴史遺産として、王陵を風水的に再現した特殊地図である「山陵図」が注目される。山陵図は、陵域を構成する景観要素は写實的に、山水は風水的に描かれるなど、風水情報が詳しく表現されている。

キーワード：韓国 (Korea), 朝鮮王朝 (the Joseon dynasty), 王陵 (royal tomb),
歴史地理 (historical geography), 風水 (fengshui)

1. 序論

朝鮮王陵の学術的研究は、ユネスコの世界文化遺産への登録を機に新たな原動力を得、転機を迎えている。近年、様々な学問分野から朝鮮王陵に対するアプローチが行なわれ、研究成果が蓄積されているが、歴史地理や風水的な研究も欠かすことのできない課題である。朝鮮王陵の分布や立地・配置の景観パターン、王陵の造営と管理に与えた風水的影響の解明は、朝鮮王陵を理解する基本テーマである。特に風水は、朝鮮王陵の立地および造営原理として大きな影響力を与えただけでなく、朝鮮王朝において政治的言説として機能したため、朝鮮王陵を理解するうえでカギとなる。

朝鮮王陵の景観を理解するにあたっては、形態的特徴に対する歴史地理学的な分析のみならず、立地および造成過程をめぐって展開した権力者諸集団の空間政治学に対する言説が、重要な視角となる。朝鮮王陵は単なる王室の墓という枠を越え、王、王室 (王族)、王と臣下、臣下同士といった複雑な政治権力の力学関係が投影された景観の産物でもあり、空間と政治集団、あるいは空間と権力に対する弁証法的言説が、景観を解釈するうえで重要な観点となるであろう。

朝鮮王陵は、朝鮮時代に特定かつ固有の文化現象ではなく、通時的には新羅や高麗から継承されつつ朝鮮的特徴に変遷した歴史的過程の産物であり、共時的には中国から一定の影響を受け、明・清代の帝陵の景観と比較可能な文化的要素である。従って時間・空間的側面からの巨視的な見識が求められるといえよう。

以上のような展望と研究方法をもとに、本稿では、朝鮮王陵の分布・立地・配置に見られる歴史地理的形態の特徴と朝鮮王陵の景観を作り出した内的原因としての空間政治的背景、そして風水的景観の造営および管理の事実について検討したい。その構成と順序は、以下の通りである。

まず、朝鮮王陵の分布と立地、配置の特徴について調べる。朝鮮王陵の景観の特徴を明らかにするため、新羅と高麗の王陵、さらに中国の明・清代の帝陵とも対比する。

次に朝鮮王陵の空間政治学について考察する。王陵の造成をめぐって展開した政治権力の意図と内容、社会集団の力学関係を類型化し、分析を加える。

最後に、朝鮮王陵の風水的関連事実を検討する。朝鮮王陵の立地・造成・管理過程に与えた風水の役割を考察し、朝鮮王陵の風水的再現物である山陵図を分析する。また朝鮮時代王陵の風水が持つ風水史的言説の地位と意味についても論じる。

以上の成果は、朝鮮王陵に対する歴史地理的かつ風水的な理解の幅を広げ深化させるにおいて一助するところがあるものと期待される。

2. 朝鮮王陵の分布と立地の特徴

朝鮮王陵にみられる地理的分布と立地の特徴は、通時的に新羅・高麗の王陵と、共時的に中国の明・清代の王陵との対比によって明確になる。

朝鮮王陵の分布様相を見ると、大部分が都城を中心に100里（約40km）以内に分布しており¹⁾、その中で8～16km以内に分布するものが26基と過半数を占めており、最も頻度が高い。朝鮮王陵はいくつかの例を除くと漢陽からおおよそ4～40kmの範囲内に分布しているが、新羅王陵は半径1～6km以内に分布するものが大部分である。都城を中心にみると、朝鮮王陵の空間的分布範囲は新羅王陵より広域化の傾向を示している。また漢陽（都城）を中心にみると、朝鮮王陵は都城の北東側と北西側圏域に32基が集中しており、漢江を越えた南側には7基のみと少ない。これは王宮の近辺にある方が陵域への行幸や陵域の管理において有利だったためである。また漢江は都城への接近を隔絶する交通の障害物であったため、その対岸は陵域立地の制限要因として作用したのである。朝鮮王陵は漢陽都城を中心にその外郭に点在しているが、『朝鮮王朝実録』には朝鮮王陵のこのような分散の問題点を指摘する記事がある。

徐相公治登なる者が…、「あなたの国の先王の陵寝を中国の天寿山の制度のように一つの山を占拠してつくることはできないのか。各山を分占するというのは、万歳を継承する方法ではない」と述べた²⁾。

朝鮮王陵の陵域景観を見ると、入り口に立てられた紅箭門から陵までの距離はおおよそ150-200m前後であり、同域内異陵間の距離は多くは300m前後だが、500mを超えるものもある³⁾。

中国の明・清陵は、朝鮮王陵に比べ、相対的に都城から遠く離れた一定区域に集中している。明の十三陵は紫禁城から直線距離で44kmほどあり、清東陵は111km、清西陵は104kmもの距離がある。また明の十三陵は北京都城の北側に、清陵は各々東南東、西側の指定された陵域に集まっている。陵域入口（牌坊）から陵までの直線距離も、中国の陵は朝鮮王陵よりはるかに長い。一例を挙げると、清東陵の孝陵は3.18kmに達している。

表1 朝鮮王陵の分布の特徴

項目	分布の特徴
都城からの距離	100里（約40km）以内。20～40里の間が過半数
都城からの位置	北東側と北西側が多数
空間的分布範囲	広い（新羅および高麗王陵対比）
分布の密集度	分散（中国明・清陵対比）
同域内異陵間の距離	300m前後

1) 朝鮮民主主義人民共和国に所在する厚陵と驪州の英・寧陵、寧越の莊陵を除外したものである。

2) 『宣祖実録』28年（1595）6月24日

3) 隆陵と健陵間の直線距離は580mに達する。

朝鮮王陵の地形的な立地傾向を通時的に歴代王陵と比較して調べると、おおよそ慶州の新羅王陵は平地（野：一般平地あるいは山を背にした平地）および丘陵地に、江華の高麗王陵は山地（山腹）に、漢陽の朝鮮王陵は山麓に位置するという視覚的な景観パターンがみられる。また朝鮮王陵の立地的パターンとしては、一般的に小盆地に位置する⁴⁾。陵寝を中心とした立地上の相対的な高度を比較すると、新羅・高麗・朝鮮王陵はそれぞれ低位・高位・中位に大別される。王陵の地形的立地が、新羅の平地・丘陵地から、高麗および朝鮮の山腹あるいは山麓へと移り、小盆地に分布するパターンを見せるのは、風水的要因が反映したためと判断される。

表2 韓国における王陵の地形的立地傾向の概観

項目	朝鮮王陵	新羅王陵	高麗王陵
地形景観	小盆地の山麓	平地・丘陵地	山地（山腹）
相対高度	中位	低位	高位
絶対高度	150~200m ⁵⁾		
地質の特徴	縞状片麻岩／花崗岩 ⁶⁾		

朝鮮王陵の方位上の配置様相を坐向（正面の向き）と関連させてみると、全49カ所のうち、子坐午向（8カ所）が最も多く、癸坐丁向（6カ所）、壬坐丙向（5カ所）、艮坐坤向（5カ所）、酉坐卯向（4カ所）、乙坐辛向（4カ所）、甲坐庚向（3カ所）、庚坐甲向（3カ所）、亥坐巳向（3カ所）、乾坐巽向（2カ所）、卯坐酉向（2カ所）、その他に辛坐乙向、丑坐未向、戌坐辰向、申坐寅向が1カ所である。南向き（南、南東、南西）に含まれる午向、丁向、丙向、坤向、巳向、未向、巽向は全30カ所で割合は61.2%にのぼる。東向き（東、東南、東北）に含まれる卯向、乙向、辰向、甲向、寅向は全10カ所で20.4%、西向き（西、西南、西北）に含まれる酉向、庚向、辛向は全9カ所で18.4%となる。北向きは皆無である。このように見ると、朝鮮王陵の方位配置は大部分南向きが好まれ、次いで東向き、西向きが見られ、北向きは皆無であることから、北向きの配置を避けたといえよう（図1）。

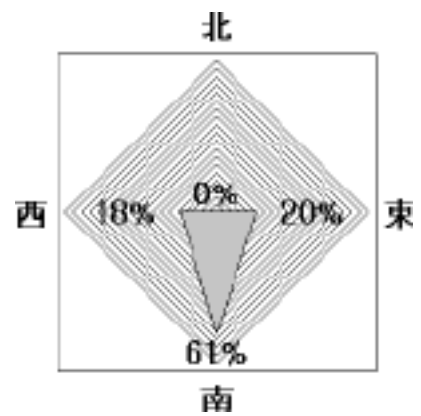


図1 朝鮮王陵の坐向配置の比率

4) 相対的に中国の明・清陵は広域な巨大盆地で山を背にして立地している。

5) チャン・ウンミ、パク・キョン「朝鮮時代における王陵の空間的分布特性」（『韓国GIS学会誌』14-3、韓国GIS学会、2006）、285~289頁

6) チャン・ウンミ、パク・キョン（前掲論文、2006）、285~289頁

3. 朝鮮王陵の空間政治学

朝鮮王陵の分布・立地・配置・景観にあらわれた形態は、それを形成させた政治社会的な内的要因と原動力が空間的に作用した結果である。朝鮮王陵は王朝の社会的景観という属性を有しており、その造成をめぐって展開した政治的な権力の意図と集団の力学関係が反映されているのである。こうした空間政治学的観点、つまり権力集団がいかにして立地と景観によって彼らの政治的意図を達成しようとしたのかは、王陵理解における重要なカギとなる。

政治的権力集団は、立地と景観から政治的統治をスムーズに遂行し、またアイデンティティや権威を強化する空間的な政治戦略を立てた。朝鮮王陵の築造は、その戦術的形態と方式の一つであり、政治社会的な機能をも果たした。王陵は王室の権威を示す象徴的景観であり、王権と臣権が角逐した場であった朝鮮王朝の政治力学的構造上、王権が主体となった王陵の権威的造成は臣権を押さえつける強力な王権強化策でもあった⁷⁾。朝鮮王室による王陵造成過程で見られる頻繁な実例が示すように、王陵地は主に臣下たちの墓地のうち良い場所を選ぶ場合が多かったため、王権が強力であった時には臣下の墓地を強制的に占領したが、これは王権を誇示して臣権を支配・統制するには十分なことであった。

特に、王陵地の選択および遷陵過程を歴史的に考察すると、政治的理由と権力の意図が深くかかわっていることが見出せる。王陵の立地（位置）と形態、施設物などは王権と臣権間の政治力学的関数関係によって左右されたが、朝鮮中期に王権が弱まると王陵の規模や施設物が縮小することもあった。そして、朝鮮朝政治社会における王陵の地位と影響力は地方行政の中心地（邑治）の移動を招くほど大きかった時もあった。つまり、正祖代に隆陵の造成地として華城が選ばれたことで邑治の移動が行なわれ、新都市華城が建設されたのである。

朝鮮王陵が担った政治的機能は王権強化のための権威的かつ象徴的な空間としての役割だけではなく、朝鮮王陵の造成をめぐって展開した様相と関係には王と王室、王と臣下、臣下間という集団間の社会的力学と政治的計算が複雑に絡み合っているのである。朝鮮王陵の政治史を通時的に概観すると、立地や造成過程に反映した政治力学的関係の様相は、王権強化、王室での正統性と主導権獲得、王権と臣権の権力競合、権臣間の勢力拡大など多方面にかけて展開していた。それらは王権の臣権に対する支配・統制型、王室内部の政治的闘争および正統性確保型、王権と臣権の競争型、臣僚間の主導権争い型などに分類できる。

王陵の選地や遷陵を決定づけた風水の要因もまた、該当政治集団の意図や言説の影響圏内にあり、政治的力学関係によって支配された。王陵の立地景観は、王や王室、王族、王と臣下、臣下間の勢力関係が風水を政略的手段や名目にしてあらわれたものであった。これらによってアウトラインが決定した後も、具体的な選地（立地）において、政治が主因として、風水が副因として作用したと考えられる。このように朝鮮王陵にはいずれも風水的立地景観が見られるが、風水は王陵地の選択を決定づける要因にはならなかったのである。

7) チャン・ヨンフン 『王陵風水と朝鮮の歴史』（テウォン社、2000）、98頁

4. 朝鮮王陵と風水

1) 朝鮮王陵の造成過程と風水

韓国の風水史からみると、王陵風水は朝鮮時代の風水の歴史的特徴であると共に政治社会的言説であった。朝鮮時代において王陵は風水地理的条件を厳密に判断して陵の場所が決定され、その場所での陵の位置と配置、陵域景観の造営および事後管理は風水の原理に立脚して行なわれた。特に風水的な影響から、陵の明堂（良い地）が重視され、その決定においては多数の専門家が動員され、立地評価や検討が行なわれ、さらには王が直接視察することもあった。

朝鮮王陵の築造は、山陵都監によって主管されていた。王が崩じると、その5カ月目に葬礼が行なわれたが、忌日の前に礼曹の堂上官と風水学提調が、書雲觀の官員を率いて葬儀を執り行なう場所を選んだ。陵地が決まると、議政府の堂上官が検証し、王に報告する。王の允許を得ると陵域が定められ、陵地には吉日を選んで塋域が造られた⁸⁾。

王陵の選地や普請の過程にあらわれた風水の影響について、『朝鮮王朝実録』所載の太祖健元陵を例に挙げておく。

太宗8年（1408）5月24日に太祖が崩御すると議政府で殯殿・国葬・造墓・斎の4都監と13色を設置した。太宗8年（1408）6月12日に領議政府事河崙たちを送り山陵の場所を見に行かせたが、良い場所ではなかったため再度選ぶことにした。太宗8年（1408）6月28日、ついに山陵を楊州の儉巖に定めた。太宗8年（1408）7月5日に各道の軍丁を徴発して山陵の普請に賦役させ、陵が完成すると、死後5カ月目となる太宗8年（1408）9月9日太祖の靈柩を奉じ、健元陵で葬式を執り行なった。

表3 『太宗実録』の健元陵造営過程記事

日付	朝鮮王朝実録の記録
太宗8年（1408） 5月24日	太祖が崩御した。 政府において、殯殿・国葬・造墓・斎・都監と喪服・玉冊・服玩・棺槨・祭器・柳車・法威儀・喪帷小造・山所・靈飯・儀仗・墓所鋪陳・返魂など13色を設置した。
6月12日	領議政府事河崙らを派遣し、山陵の場所を見に行かせた。判漢城府事劉早雨・書雲正李陽達らは「家臣らが山陵の場所を得ようと原平のかつての蓬城に至り、吉地を得ました」と申し上げた。そこで河崙を送り見に行かせたが、河崙は帰ってくると「李陽達らが見た蓬城の地は、使うに値しません。海豊の幸州に、地理の法からみて少しはふさわしい地がございます」と奏上した。王は「再度別の場所を選ぶように」と命じた。
6月28日	山陵を楊州の儉巖に定めた。最初に領議政府事河崙らが再び劉早雨・李陽達・李良らを率いて楊州の陵の場所を巡検したが、檢校參贊議政府事金仁貴は河崙たちに「私が住む儉巖に、吉地がある」と言った。河崙たちが見に行ったところ、まさしく吉地であった。造墓都監提調朴子青が工匠を率い、普請を始めた。
7月5日	各道の軍丁を徴発して山陵の普請に賦役させたが、忠清道から3500人、豊海道から2000人、江原道から500人であった。7月、晦日を期して普請を始めさせた。
9月9日	靈柩を奉じて健元陵で葬式を執り行なう。

8) 『国朝五礼儀』巻7, 凶礼, 治葬。『世宗実録』, 五礼, 凶礼儀式, 治葬。

2) 朝鮮王陵の景観と風水

朝鮮王陵は、風水的原理に基づいて立地と配置が定められた。風水的立地景観において模範となるのは、背山臨水の山麓を持ち、四方を山と丘陵地に囲まれた小盆地である。また陵寝と付帯施設物の配置は、おおよそ陵の背後にある主山と、その対面で向き合う案山の軸線を基準とし、自然の地形・地勢に合わせて定められた。陵域景観において風水的な裨補（人為的な地形の改造）が必要な場合は、埋め立てや池・林の造成も行なわれた⁹⁾。

中国明・清代の陵は、風水的立地と配置景観が見られるという点において、朝鮮王陵と同様である。ただ立地上の地形規模が広域的である点や、左右対称をなす直線軸上に陵寝と施設物を配置する点は、朝鮮王陵と異なっている。

また陵寝の造成において、朝鮮王陵が自然丘陵の緩斜面を利用して土を補充するのに対し、中国帝陵の多くは平地に人工的な半球形の陵寝を造成する点にも違いがある。陵域に不可欠な風水景観としての流路（明堂水）も、韓国では自然地形に順応させているのに対し、中国は意図的に流路を屈曲させ、風水的景観を強調しているのが明らかである。

朝鮮王陵に見られる風水景観要素の一例として、池（池塘）がある。『康陵誌』には「朝鮮時代の陵の前には必ず蓮池があった」とあり、池が陵域の一般的景観要素であったことが知られるが、『春官通考』（1788）には朝鮮王陵に20の池があったとする¹⁰⁾。池は陵寝の左右の明堂水が合流する水口部に造られ、おおよそ陵域の進入空間に該当する齋室と紅箭門の前に位置する（図2・3）。陵域前面が広く空疎な場合は、風水的裨補として造成され、これらは休息空間、防火水として実用的機能をも果たした。これらの池のうち現存例は9カ所がある¹¹⁾。



図2 莊陵 山陵図に再現された風水景観。
『越中図』（18世紀以後）



図3 東九陵の風水景観と蓮池。『海東地図』
(18世紀中葉)

9) Lee, Chang-Hwan・Jo, Woon-yuen, 2007, The Circumstances and Cultural Characteristics of Royal Tomb Sites in the Joseon Dynasty, *Journal of the Korean Institute of Traditional Landscape Architecture* vol 5, p.72

10) 健元陵, 崇陵, 莊陵, 景陵, 禧陵, 孝陵, 翼陵, 英陵, 寧陵, 長陵, 懿陵, 靖陵, 泰陵, 康陵, 貞陵, 義陵, 章陵, 齋陵, 厚陵などである。

11) キム・ホンニョン『朝鮮王陵蓮池の立地および空間構成に関する研究』（高麗大学校生命環境科学大学院修士学位論文, 2009), 1頁

3) 朝鮮王陵の管理と風水

朝鮮王朝において王陵の管理状態は毎年、王に報告された。特に主山の来脈は風水的に重要な場所であり、そこに敷かれた薄石（平らで薄い石）の剥がれ、くぼみ、毀損などは観察使によって王に報告された。朝鮮初期の法典『経国大典』（1471）奉審條には、風水にかかわる王陵の管理規定がある。

- ①山陵は毎年、本曹が提調とともに奉審して王に報告する。地方は観察使が王・王妃・王世子（太子）の胎室と宗廟各室、王後の両親の墓所まで全て調べよ。
- ②いくつかの山陵の主山・来脈に薄石を敷いた場所に、老朽化や雨水による崩壊、くぼみなどがあれば、観察使が全て調査し、王に奏上せよ。
- ③歴代始祖および高麗太祖以下4位顕宗・文宗・忠敬王の陵寝は、所在地の守令が毎年巡検せよ。また畑を耕したり薪を集めたりすることを禁じる。

朝鮮後期の英祖代に編纂された『統大典』においては、王陵の奉審規定がさらに具体的に整備された。陵の上の莎草と石物に欠損や失火があると、改府大臣、礼曹の堂上官と郎官、観象監と繕工監提調、さらに相地官と画員を加えて調査させ、雨漏りで亀裂が生じると、議政を送って修改した¹²⁾。英祖と正祖の前後期には、陵の修改もさることながら陵域周辺の山林管理を重視した¹³⁾。風水担当官僚の陵管理の役割規定について、『書雲觀誌』（1818）には次のような記録がある。

- ①各陵の封陵上の莎草・石物に欠損がある所と陵上に失火がある所には、政府と本監の提調・相地官が進んで奉審する。修改する時も同じである。
- ②陵幸時の相地官一員は、教授・訓導を交替で選出する。
- ③国陵に封標した場所と胎峯に置簿した所を看審する際の相地官と、礼葬時の加定官には、教授・訓導およびこの位を有する者を選出するが、加定官は吏曹に移文して帰厚署に啓下する。

朝鮮では、王陵の管理をめぐる思想的には風水と儒教、社会的には風水官僚の風水的原理原則と儒臣の経世の実用主義が対立・葛藤し、折衝・調整される様相を招くこともあった。その代表的な例が、世宗代から文宗・世祖代まで続いた、献陵の蜂腰に該当する道の通行に関する論争である。これは献陵において、実用的機能を優先して風水的要所であっても通路をつけるのか、あるいは風水的意味を優先して不便でも通路を設けないのか、というものであった。この論争において、風水論に基づいて道を設けない原則論、道を遮る必要はないという实用論、道は設けるが地脈保護のために薄石を敷くという折衝論が登場し、それぞれに従って道の廃止、設置、薄石の設置などが行なわれた。ただ議論の方向性としては、王陵への風水的影響を受け入れるという枠組に基づいて決定されるのが支配的である。実

12) 『大典会通』巻3, 礼典奉審, 中樞院本 363頁

13) 『春官通考』巻17, 吉礼陵寝健元陵。正祖は顕隆園と各陵の禁松など山林保護に努めた。

用論による便宜よりも風水論による原則が、意思決定の過程において作用したのである¹⁴⁾。

4) 朝鮮王陵の風水的再現, 山陵図

朝鮮時代王陵の造成, 配置, 形態に関する主な内容は, 山陵図に詳細に表記されている。邑の地図をあらわした郡県図(図4)には, 王陵立地の地勢と位置が概略的に表記されているが, 山陵図(図5)



図4 海東地図(楊州牧、部分)



図5 寧越莊陵山陵図(越中図)

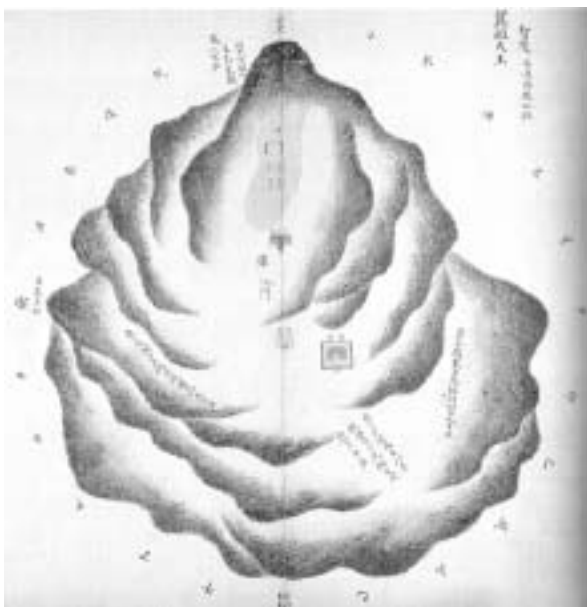


図6 智陵図

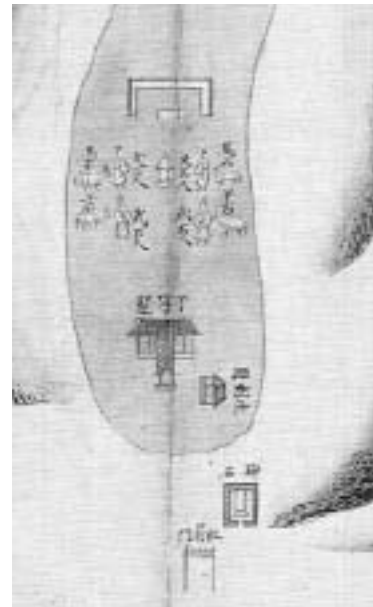


図7 純陵図(部分)

14) 世宗12年(1430)7月乙巳。文宗1年(1451)10月辛巳。世祖10年3月甲子, 世祖10年4月甲辰。

には陵域を構成する景観要素が絵によって写實的に描かれ、さらに風水的立地条件に関する風水形勢の山水描写と共に詳細な風水情報が記されている。山陵図は朝鮮王陵を絵で再現した特殊地図として注目される。

以下、朝鮮時代後期の山陵図から、風水的再現状況についてみていく。1808年から1840年の間に製作された智陵図（図6）には、中心の陵を山が取り囲む姿が明確に表現されている。陵の下には文石人と武石人などの石物があり、丁字閣と水刺間、紅箭門、碑閣、斎室などが詳しく描かれている。軸線は陵の坐向（壬坐丙向）であり、24方位が記されている。そして、来龍が左に回る（来龍左旋）風水的記載も見られる。丁字閣から主山の峰までの距離や、外青龍と外白虎が互いにつぶつかる場所までの距離も記入されている。純陵図（図7）には、陵域の施設物がたいへん写實的に描かれている。

5) 朝鮮時代の王陵風水に関する言説

王陵の風水的立地や景観は朝鮮時代に入り、陰宅風水論の原則にのっとり、格式を整えて成立した。文献によると、韓国において風水が王陵立地の主要因として登場するのは、遅くとも8世紀末である。『大崇福寺碑文』には、798年に新羅王室で慶州近隣の鶴寺という寺址の風水が良いため、王陵地として造成するかどうかを議論した内容が見られる。

高麗時代においても、風水は王陵の立地や景観構成に影響を与えたと推定されるが、比重と地位は、朝鮮時代に比べると顕著に低かった。高麗の政治や社会を支配した風水言説は、主に首都の延基や宮殿の造成、自然災害に対する防備の補助的環境管理、寺刹配置など、風水図識や裨補風水に基づいた陽宅（陽基）風水にあり、王陵のような陰宅風水ではなかったのである。高麗時代には、風水専門の機構として書雲観があったが、王陵の造成や管理を行なった史料は見出せず、朝廷で取才した風水試験科目が陰宅風水書だったとする確証もない。

王権が、王陵をはじめとする陰宅風水を、政治権威を高める手段として活用しはじめたのは、儒教における「孝」の観念と関連した陰宅風水的イデオロギーや社会言説が社会的に広がった高麗末から朝鮮時代にかけての時期であると推定される。朝鮮時代には、観象監において王陵の風水を専門的に担当・処理しており、風水の科挙科目が全て中国の正統的な陰宅風水書である点、社会階層的に風水言説が広がっていた点から、王権で王朝の権威を高める手段として風水を活用した可能性が十分に考えられる。

このように、王陵風水は朝鮮時代になって確立したものと考えられ、韓国風水史における王陵風水は、朝鮮時代特有の王朝政治集団を社会的属性として有する風水言説と言えよう。

5. 結論

以上、朝鮮王陵の分布・立地・配置の特徴と、景観の造成や管理に対する風水的関連事実を歴史地理的に検討すると共に、これらをめぐって展開した政治権力集団間の空間政治的様相を見てきた。また通時的な歴史産物として、共時的に中国明・清代の陵と比較される文化的要素として、朝鮮王陵を検討した。その内容を要約すると以下の通りである。

朝鮮王陵は、都城を中心に過半数以上が20～40里範囲内の外郭に点在し、北東側と北西側圏域に集中

しており、分布範囲が新羅と高麗王陵より広域である。また朝鮮王陵の立地傾向は小盆地の山麓にあり、新羅王陵が平地や丘陵地、高麗王陵が山地の山腹に位置するのとは異なる。立地が平地から山腹と山麓へと変化し、小盆地に位置するパターンを見せるのは、風水的要因が反映したためである。同域内における陵同士の距離は300m前後が多く、紅箭門から陵までの距離は150～200m前後である。朝鮮王陵の坐向は南向きが絶対的であった。陵寝は緩斜面の自然地形に土を補充して作り、明堂水もやはり自然地形の流路などに順応させて作った。

中国の明陵は、直線距離にして40km以上、清陵は100km以上の距離を置いて立地しており、明陵は都城の北に、清陵は東南東と西の指定陵域に集中している。陵域入口（牌坊）から陵寝にいたる道も長く、清の孝陵は約10里（4km）に達する。明・清代の陵は立地規模が広域であるが、風水的な立地・景觀が明白である。明・清代の陵は、左右対称をなす直線軸上に陵寝と施設物を配置しており、朝鮮王陵のように自然地形に合わせた造営意識とは異なる。自然地形の利用においても、中国の陵は平地に人工の半球形陵寝を造成し、流路も人為的に屈曲させ、風水の景觀を強調した。

朝鮮王陵の景觀は、王朝の権威かつ象徴であった。朝鮮王陵の立地選定や遷陵の過程は、王室や王族、王と臣下、臣下間の政治的勢力関係が風水説を政略的手段や名目にしてあらわれた政治史の結果であった。朝鮮王陵の造成過程で見られる主導権争いは、王権の臣権に対する支配・統制型、王室内部の政治的闘争および正統性確保型、王権と臣権の競争型、臣僚同士の主導権争い型などに分類される。

風水は、王陵の造成過程や景觀築造に大きな影響を与えた。朝鮮王陵は風水地理的原理に沿って陵の位置と配置、陵域景觀の造営がなされたため、風水的立地景觀を見せる。王陵の管理状態は毎年定期的に王に報告され、国家の法典によって管理や担当、その役割が規定されていた。朝廷では王陵の管理をめぐり、風水官僚の立場（風水的原理の固守）と、儒臣の立場（経世の実用論理）の対立や調整が見られた。

朝鮮王陵に係る歴史遺産としては、朝鮮王陵を風水的に再現した特殊地図である山陵図が注目された。山陵図は、陵域を構成する景觀要素が風水的山水描写を用いて写實的に描かれており、詳細な風水情報が盛り込まれている。

韓国史における王陵が、風水論の原則にのっとって立地や景觀が造成されるのは、朝鮮時代以降である。朝鮮時代の政治集団は、政治的権威を高める象徴的手段として王陵を利用し、風水は政治集団の空間イデオロギー的説明として機能した。韓国風水史における王陵風水は、朝鮮時代特有の王朝政治集団を社会的属性として有する風水言説と言えよう。

